

「そこ處かい。退け〜。…………ア、失敗ふたなア…………。何やら今日は氣が進まなんだ…………。廢めときや良かったなア…………矢つ張り虫が知らしてたんや…………夢やつたら良えのに…………一遍頻べた捻つて見たろ。痛ツ。不可ん。起きてる…………。」

酔も何も何處へやら眞蒼な顔して走つて歸るなり、以前のお菓子屋で着物もそこ〜に着替えて、店へ戻つて参りました。

「番頭はんお歸り」

「へエ、お歸り」

「…………定吉。親旦那は…………。」

「あの親旦那はなア、貴方はんが出なはつた直ぐ後から玄伯さんを連れて櫻の宮へ花見においでに成りました。」

「左様か…………ウーム…………。」

「ア呻つてはる。…………番頭はん何處ぞ惡ふおますか。」

「何でも宜え、二階へ寢床敷いて呉れ。頭が痛ふて叶わん、暫く寝る…………。」

二階へ上て横には成りましたが、迎も眠る處や御座りまへん。

「ア、〜。四十二まで奉公して、來年別家の身分。川口で船破つたか、今日は何とした悪日やろう

なア…………。」

「ア、玄伯どん豪い目に逢わたしたな。定めし疲れなかつたぢやろ、鳥渡寄て茶の一杯も喫んで去になさらんか。ア、左様かナ、夫れでは茲で別れましょ。ウム何、その土産物かいな。イヤ〜それはお宅の御内儀へと思ふて買ふたんぢや。エーこれ、何を云ひなさるのやいな。そんなら明晩、土井さんで又お目に掛りましょ。ハイ左様なら…………唯今歸りました。」

「お歸り。」

「へエお歸り。」

「お歸り。」

「へエ、お歸りやす。」

「定吉…………番頭どんはナ。」

「先き程お歸りになりました、頭が痛い云ふて寝んでやります」

「ホ、ウ。番頭どんは具合が悪いか…………ウム。随分大事にして貰ふのぢやぞ。あれは内の眞柱ぢや。」

「ウワー…………堪える〜。あア辛いア…………もう暫くしたら鳥渡來いか…………時に前も、永年辛棒して呉れたけど。と来るやろなア…………いやモツと酷いかも解らんで…………次兵衛ツ…………一遍坐れツ…………いやそんな言葉は遣やはらんと思ふなア…………何と云われても一言も無いのや依て薩張りワヤや…………」